「キリスト者の条件」

エペソ人への手紙１：１５－１６

February.6.2022

エペソ人への手紙１：１５－１６（パワポ）

Preface

エペソ人への手紙１章は、３節から１４節の前半部と１７－２３節の後半部と分けることが出来ますが、今読みました１５，１６節は、その前半部と後半部を繋ぐ連結部でありながら、私たちキリスト者が決して逃してはならない鍵となる聖書箇所でもあります。

パウロは、今ここで、エペソ教会についての嬉しい知らせを聞きました。
それは、エペソ教会の信徒たちが、信仰と愛に生きているということでした。
そして、この信仰と愛こそが、私たちキリスト者が決して失ってはならないひとつの鍵です。

何のための鍵かと言いますと、３節から１４節まで語ってきた膨大で甚大な神様の救いのご計画と、そのご計画の中心に入れられているという恵みを実生活において体現しながら生き、またこの世ではなく、主イエス様の再臨とともに来る完成と来る世へと導く鍵です。

つまり、キリスト者とは何者なのか？　最低限、どんな条件、何が備わっていることをもってキリスト者と言えるのか？　または、エペソ書で約束されている祝福を実生活の中で実感するためには、何が必要なのか？と問うならば、それこそ、信仰と愛だということです。

使徒パウロは、このキリスト者をキリスト者たらしめる鍵である信仰と愛が、エペソ教会の信徒たちにあるという知らせを聞き、とても喜び感謝しました。

そこで今週と来週に渡って、聖書が教える信仰とはどんな信仰で、愛とはどんな愛なのかについて考えていきたいと思っています。

Part One

聖書は私たちに、信仰を信仰たらしめ、愛を愛たらしめるための確固たる条件、または方向性を示していますが、私たちは意外にも、その条件や方向性をもうすでに分かっている気になりながら実は見落としていて、自分の考える信仰、自分の考える愛に偏ってしまいがちなところがあるように思います。

まず、今日は信仰についてですが、決してこれを外しては、信仰にはなり得ないという聖書の示す条件が、「キリストにあって」ということです。

「キリストにある信仰」こそ、キリスト者をキリスト者たらしめる最低限、または最大の条件です。
「信じれば何でもいい」と言うわけではありません。

一般的に「信仰」と言いますと、信じるという行為の度合い、またはその強度が強調されることがあります。
どれだけ、どれほどに、信じたのか？
信仰のために、どれだけ献げ、どれだけ奉仕したのか？
信じるために、どれだけ努力を重ねたのか？
そして、その信じるという努力に適う報いがあったのか？　というような私たち側の熱心や情熱や真心をもって、信仰が良い悪いと、判断してしまうところがあります。

聖書を見ても、そのような内容がよく出てきます。
例えば、預言者エリヤに対抗した４５０名のバアルの預言者たちが、大声で叫びながら、自分たちの体を剣や槍で傷つけ血を流しながら、一日中情熱を注ぎながら、熱心に彼らの信じる信仰を表したこともありました。

また、神々と言われる偶像に、自分の子供を殺して献げるほどの熱心さについても書いてあります。

イエス様に質問をしてきた「神を信じている」と言う聖書学者や信仰者たちの中にも、「私は聖書で命じられていることを幼い頃からしっかりと守ってきました」と「自分自身の信仰の熱心さを認めて欲しい」とイエス様に言い寄って行った人たちもいました。

使徒パウロとなる前のサウロも、ものすごい強い信仰の持ち主でした。
どれほどの強い信仰かと言いますと、神の恵みと力に満ちていたステパノを大勢の人が囲んで石で打ち殺す現場の現場監督をしながら誇らしげにしていたほどの強い信仰を持っていました。

これらの、神ではない者を信じている者たちも、神なるお方を信じている者たちも、いつのまにか、信仰、信じるということが、文法的に言うならば自動詞になってしまっています。
本来信じるという言葉は、他動詞で、必ず目的語を伴わなければなりません。
誰を信じるのかということがあって、初めて、信仰が成り立つわけです。

ですが、信仰における重き、またはその方向が自分自身に向いてしまっていて、信じる対象の思いや意向や関係性がどうなのかということが抜け落ちてしまっています。
「これだけやったんだから！　これだけ祈ったんだから！　これだけ献げた

んだから！　これだけ犠牲を払ったんだから！　これだけ良い行いをしたんだから！　これだけ聖書を読んだんだから！」と自分の行いに比例して、自分の願っているように何か事が起こることが、信仰になってしまいます。

信仰、信じるというのは、「何でもいいからとりあえずやれるだけ信じれば何とかなる」ということではなく、信頼関係に関する問題であり、「誰を信じるのか」という人格的な関係があって、初めて、信仰、信じるということが成立します。

以前、礼拝の中でお話したことがあると思いますが、私がクリスチャンになって、父に福音を伝えようとした時、ちょっと怒った父が私にこんな話をしてくれました。
「俺は昔、妹が亡くなりそうになった時、土砂降りの中、『妹を生かして欲しい！』と、神社で跪きながらお百度参りしたけれども、結局妹は死んだ。あんなに一生懸命に祈ったのに、叶えられなかった。それ以来、俺は神なんか信じないと決めたし、先祖だけを信じることにした！」と話してくれました。

雨に打たれ、滝に打たれ、火の粉を浴びながら、熱さや寒さに耐えながら、ひたすらにがむしゃらに祈っているような映像とか写真を見ますと、父の言い分も分からなくないですし、その努力や辛抱に敬意を表したくなります。
でもここには、信仰だと言うならば、決して抜け落ちてはいけない重要なことが抜け落ちています。

それは、「信じる対象が信じるに値し、信頼に値するのか？」ということです。
対象が抜け落ちていて、私の熱心ばかりに焦点が当たっています。

一般的に、信仰・信じると言いますと、本人の信じるという行為の熱心さに重きが置かれがちですが、本来、信じるというのは、信じる本人の熱心さに重きがあるのではなく、信じる対象に重きがあるということを、聖書はいつも教えてくれます。

Part Two

だから１：１５を見てみますと、

エペソ人への手紙１：１５（パワポ）

「**主イエスに対する**あなたがたの信仰」とあります。
あなたがたの信仰に重きがあるのではなく、「主イエスに対する」ということに重きがあります。
つまり、私たちは、私たちの信仰を信じるのではなく、イエス様を信じるのです。

私たちは、イエス様を信じて、初めてそれが信仰になるんです。
私たちが持っている何かこう高尚に見えるような信仰的理念とか、燃えるような情熱とか、献身のような私たちの行為と信仰だとして混同してはならないですね。

私たちの行いを信仰とした時に出てくるのが、自分の目にある梁には気付かず、兄弟の目にあるちりを見て他者を裁くことであって、自画自賛であって、高慢ですね。

私たちの信仰は、「イエスを信じる」「主イエスに対する信仰」と言った時だけ、信仰が成立します。
私が信じたという行いによって信仰が成立するのではなく、「イエスを信じる」と言った時だけ、信仰が成立するんです。

じゃあ、イエス様の何を信じるのか？
二つです。
主イエス様の主権とイエス様と私との関係を信じるんです。

イエス様の主権、天地万物を造り、治め、守り、導いておられる主、すべての生と死を司り、私たちの髪の毛一本抜け落ちることまで把握しておられる方。
イエス様のみが神であられ、この方の前にすべての被造物が、万物が跪き、万物がこの方の前にあっては口を閉じるお方であるということを信じること。

私たちをお造りになり、私たちの定めと行く末のすべてを知っておられる方がイエス様であることを信じること。
天地万物、すべてのもの、一切合切を把握しておられる唯一の神であられるお方が、イエス様であることを信じること。

これが主イエスを信じるということです。

私たちの要望や切迫感、緊急の度合いを訴えることが信仰の本筋ではありません。
私がどれだけ切実で、どれだけ急で、どれだけ本気で、どれだけ真心で、誠実なのかを信仰とは言いません。
「誰を信じているのか」を信仰と言います。

イエス様を信じることです。

イエス様は、私たちをお造りになり、私たちのすべてを知っておられ、私たちに天上のすべての祝福をお与えになるために私たちのところにいらっしゃったお方です。

ここに、イエス様と私たちとの、ただならぬ関係が生まれました。
その関係ゆえに、イエス様が私たちをどのように取り扱ってくださるのか、イエス様が私たちをどのようにもてなしてくださるのか、イエス様が私たちに向けてどのようなお気持ちでいらっしゃるのかを信じるのです。

では、どのようなお気持ちですか？
私たちを愛してやまないお気持ちです。
私たちは忘れることがあっても、ひと時も忘れることのないお気持ちです。
私たちのために死なれるほどのお気持ちです。
ということは、徹底して私たちの味方であり続けるとお決めになったお気持ちです。
私たちは、このイエス様との関係を信じるのです。

「私たちがまだ罪人であったとき、私たちのために死なれた」お方が、イエス様です。
私たちの両親よりも、私たち自身よりも、私たちをイエス様が愛しておられることを、私たちは信じます。
これが信仰です。

Part Three

ですがもし、私の信仰の対象がイエス様であるということではなく、私の熱心、私の誠意となりますと、どうなるでしょうか？

「私がこんなにも渇望していて、私がこんなにも急いでいて、私がこんなにも真心込めたのに、答えてくださらないんですか？　叶えてくださらないんですか？　成して下さらないんですか？　これ以上何をしろというのですか！」という石に間違いなくつまずき、ひどい時には関係を断ち、離れて行ってしまいます。
神様がもうすでに私たちにしてくださっている最大の祝福のことを、綺麗さっぱり忘れ、これっぽっちも祝福に感じずにです。

ダニエル書で、ネブカドネツァル王が自分の作った金の像を拝まないことに腹を立てて、ダニエルの３人の友人たちを燃える炉の中に投げ入れようとする場面を覚えておられると思います。
炉に投げ入れる直前、ネブカドネツァル王は最後に、３人にこう訊きました。
「お前たちが、今からでも、私の作った金の像の前にひれ伏し、拝むならば、炉の中に投げ入れないでやろう！」
すると３人の友人たちが答えます。
「王様、私たちがこの燃える炉の中に投げ入れられたとしても、私たちが信じる神様は、私たちをこの中からお救いになることが出来ます。
しかし、たとえそうでなくても、王よ、ご承知ください。

私たちはあなたの神々には仕えず、あなたの立てた金の像を拝むことも致しません。」

彼らは、彼ら自身の信じる力に拠り頼んだのではなく、彼らが信じ仕える神様への信頼、神様との関係を信じました。
このような信仰が私たちには無い、かもしれません。

クリスチャンであっても、意外にも、何とかして自分の渇望や切迫感を埋めるための手段や方法として信仰を語り、思ってしまうことがあります。
逼迫した現実問題を、現実のものをもってしてもどうにもならないから、現実を超越した存在や方法を引き合いに出す程度にしか、信仰を思っていないということです。
神との関係云々の話ではありません。

もちろん、私たちの祈りや願いを神様の前に持っていくことは正しいことですし、それを神様は望んで待っていてくださいます。
ただしかし、「私の願いと渇望が必ずや叶えられなければならない」というならば、それでもうすでに、神様の主権を侵したことになります。

今はどうかわかりませんが、私が青年だった頃、結婚する時に女性が男性に抱く３つの条件を３Ｋと言いました。
高身長、高学歴、高収入の頭文字から取った言葉ですね。

一見するとそれらしい条件のように思えますが、正直くだらない条件ですね。
結婚して夫婦生活を送ってみますと、高身長、高学歴、高収入が、二人の関係を深め、二人を一体とし、「あなたが私で、私があなた」というような夫婦関係を構築していく上で、高身長、高学歴、高収入は、何の役にも立たないことを直ぐに悟ります。

むしろ、私の両親がそうでしたが、夫が背が低くくて高いところに手が届かないならば、妻が来て助けてくれます。
学歴が下手にあると、実践も経験も伴わないのに、頭ばかりでかくて、しょっちゅうぶつかり、言い争い、「あなたの誇る学歴はどこに行ってしまったの？」と思うほどに、そこら辺にあるものが野蛮に投げつけられてきたりもします。
高収入でなく、低収入ゆえに、二人で仲睦まじく、限られた収入の中で豊かに暮らそうと知恵を絞り、買い物をし、料理をし、節約をし、貯金をしながら、たまの外食がとてもうれしく思え、またお金がなくて外食できなくても、見よう見まねで奥さんが作った手料理をちょっと難癖を付けながらも笑いながら食し、二人の関係が深められていきます。

低身長、低学歴、低収入、三拍子そろっていたからこそ、夫婦仲睦まじく、小

さなことを大きなこととして一緒に喜べ、喧嘩することもあるけど、家出するお金もないから、家に留まっているうちにいつの間にか怒りも静まり、二人の関係がいつの間にか深められていきます。

夫婦生活にあって大事なのは条件ではなく、関係ですね。

神様との関係も一緒です。
私の望む条件を満たしていただくのが信仰ではなく、神と私の関係が深められ、密接になり、もう二度と離れることは出来ない、「あなたは私、私はあなた」というような関係になっていくことが信仰であり、主イエスに対する私たちの信仰ですね。

Part Four

私たちの人生を振り返りますと、その時は、「これこそ幸いだと、これこそ祝福だ」と思ったことが実のところ幸いではなく、「憤りだと、不幸だ」と思ったことが、不幸ではなかったということがよくあります。

体の健康な方は、体力に余裕があるので、備わっている力の７０%ほどしか使わないことに比べ、体の弱い方たちは、体が弱いがために、その弱さを補おうと、体が持っている力の１２０%を使うようになって、使っているうちに、その弱さを克服する力が出てくるようになることがあるそうです。
（瀧島未香さんという９０歳の日本最高齢フィットネスインストラクターの方を見て、あ、本当にこういうことはあるなあと思わされます。
聖書を見ても、実際にモーセが１２０歳まで現役バリバリで生きましたよね）

弱いことが必ずしも不幸ではなく、強いことが幸いでもなく、神様は私たちが不幸だと思われることや弱いと思われることを用いなさって、信仰を、神との関係を深めてくださいます。

私たちの人生の中で困難だったことが、私たちにどれだけ多くのことを考えさせ、普通だったら絶対できないようなことを結果的に生み出してきたことか。

挫折や絶望がなかったら、霊的渇望を覚えることもなければ、「なんて人生は果かないんだ」と思うこともなければ、「何が善で何が悪なのか」と悩むこともなければ、何が価値あるもので、何が真理で、何が本物なのかを悩むこともなく、今のようにイエス・キリストを信じるという選択をすることもなく、未だに死を恐れながら、びくびくしながら生きていたことでしょう。

私たちの人生を常々振り返ってみますと、「神様がお決めになり、私たちをもってして歩ませた道はいつも正しかった」と、「道がないと思って進んでみたら、神様がそこに道を備えてくださっていた」と、認めざるを得なくなります。

だから聖書は、私たちに信仰を要求します。
主イエス様を信じ抜くことを要求します。
神様がなさること、神様の方法や手段の大部分が、明らかに私たちが納得も出来なければ理解も出来ないことの方が遥かに多いがために、イエス様を信じ抜く信仰を私たちに要求されます。

神様が私たちに断りもなく導き、私たちの同意もなく介入して来られるすべてのことについて、私たちに与えられている唯一の根拠は、信仰です。
信仰という神との関係構築以外、何もくださいません。

神様の品性、私たちとの関係、善であられ、義であられ、慈しみ深く、情け深く、哀れみ深く、神を求める者たちを無視することなく、ひとり子イエスを殺すほどに私たちを愛しておられるというその言葉以外に、神のお気持ちを説明する言葉は聖書にはありません。

まあある意味、それだけで十分です。
それ以上は、私たちにはよく分かりませんし、
もし、いちいち説明してくださったしても、私たちには理解できません。
これが信仰です。

イエス様ご自身が、このような信仰告白を最後口にして十字架に架かられました。
「父よ、出来ることならばこの杯をわたしから過ぎ去らせてください。
しかし、わたしが望むようにではなく、父よ、あなたの望まれるままに、なさってください。」
これが、イエス様が私たちに示してくださった信仰です。

１世紀から２世紀にかけて生きた初代教会の指導者のうちの一人に、ポリュカルポスという人がいます。
ヨハネの福音書を書いたヨハネの弟子だったと言われていますが、このポリュカルポスが８０歳になり、ついに自分が殉教する番が巡ってきました。

その時彼を尋問した人が、ポリュカルポスの最後の言葉を書き残しました。
尋問者がポリュカルポスに訊きます。
「今からでも、お前が、お前の信じる主を否定するならば、お前の命を救ってやろう。」
この尋問に対して、ポリュカルポスは、現代まで語り告げられる有名な言葉を残しました。
「私の主なる神様は、私の人生８０年間、ただ一度も私を裏切ったことがありません。それなのに、今になって、私がどうやって主なる神様を裏切ることが出来るでしょうか？」

こういうのが信仰です。
私の熱心や私の高邁な人格を誇ることが信仰ではなく、私がどれだけ正しくて、どれだけ正義感に溢れているのかを表現することが信心ではありません。

もっと明確に言いますと、**私が、**主なる神様にどれだけの熱心をもって献身するのかということさえも、信仰の真髄ではありません。
信仰は、キリストの内にあるものでなければなりません。

Conclusion

ピリピ人への手紙３：３（パワポ）

キリスト・イエスを誇り、肉に頼らない、人間的なものに頼らないことこそ、信仰です。
主イエスの中にいなければならないのが、信仰です。
自分の熱心を信頼し、自分を信じるなら、それは一種のヒューマニズムになります。

信仰をもって何かをするということは、「精神統一、心頭滅却すれば、自分の奥底にある潜在能力を引き出し、望んでいることが出来るようになる」という自己啓発ではありません。
ややもすると、信じるということが、自分の能力や才能を開発する戦いになってしまいますが、それは信仰とは別個のものです。

私たちの信仰は、端的に言いますと、私を殺し、主イエス様を信じることです。
信仰が、自分を信じることになってしまったら、もうそれは信仰ではないですね。
イエス・キリストの主権と、イエス・キリストが私たちを愛しておられるということを信じることが信仰です。

だから、私たちは、私たちを信じるのではなく、イエス様を信じましょう。
主イエスに対する、私たちの信仰でありたいと願います。

お祈りいたします。

祝祷：ピリピ人への手紙３：３